

## 『そしてわたしだけ残つてしまつた』

Kan

栃木県の山奥に、底のまるで見えない切り立った谷がございました。そこには、頼りないロープの吊り橋がひとつ架かっており、その先の孤立した崖の上に一軒の山荘が建っていました。

その名を『湖月荘』と言います。

さて、そこには、六人の男女が合宿と称して、宿泊しておりました。

……というのは、わたしたちは、とある大学のミスティリ研究会の会員だったのです。

柱時計の針がカチリカチリと音を立てています。

「空虚な音だ。せつかくお誂え向きの状態だというのに、ミステリらしい展開は何ひとつ起きない……」

「そうだな。人、ひとり殺されてしまえば面白いのに」

そんなことをみんなで語り合つていました。

その夜のことです。ひとりの女子生徒が包丁で刺されて殺害されました。その女子生徒は『渡邊瑠奈』という名前の一年生でした。殺された場所は湖月荘の台所です。その殺された時の体勢といつたら、とびきり奇怪なもので、仰向けの状態で、両手の指先を頭部にくつづけるようにかかげていて、それはまるでM字の形、子どもがお猿さんの物真似をしているみたいなのでした。両足は正座をしたまま、後ろにぱつたり倒れて、まるで膝を曲げるストレッチをしているみたいだったのであります。

おまけに、この女子生徒は『鍋の蓋』を、体の横に並べて出入口から見えないように隠していました。そこには彼女自身の血の手形がくつきりと残っていたのです。この鍋の蓋は元々、台所の流しの下の棚にしまわれていたものです。

そして、台所の床はあたり一面、鮮血にまみれて足の踏み場もなかつたのです。

「どうもこいつは奇つ怪な殺し方だ。しかし出血多量の失血死であることを考えると、被害者のこの不自然な寝姿も、鍋の蓋を体に隠しているのも、犯人の演出ではなくて、被害者自身のダイイング・メッセージなのだと分かること……」

「何故だい。被害者の絶命後に、犯人が被害者をこの体制に変えて、その上、鍋の蓋を死体の横に隠したのだとも考えられるじゃないか」

と、ワトソン役の児玉善次郎は反論します。

「それならば、床に拡がった鮮血に、犯人の足跡が少しでも残っているはずさ。それがまったくないってことは、犯人は包丁で刺した後、すぐにこの場から離れたということさ……」

「おお、なんと明快な推理」

得意げに推理を披露する、吉野葛探偵は、エラリー・クイーンのような顔をしていました。

「そして犯人は君だね。鍋島君……」

吉野葛探偵は、振り返りながら爽やかに、立ち尽くしている二年生の鍋島元道を指差しました。

「僕が犯人だつて……何故だい。吉野葛君……」

鍋島元道は、吉野葛の言葉に真っ青になつて必死に問い合わせました。

「なあに、簡単なダイニング・メッセージだよ。被害者渡邊瑠奈は、『鍋』の蓋を棚から取つて死んでいたのだからね。それは鍋島の『鍋』を暗示しているのだね。そして被害者は、両腕と両脚の形で、ふたつの『M』の字を表している。『元道』は、一文字ずつがそれぞれ『M』で始まっている名前だよね。これはつまり、鍋島元道君。君の名前を如実に表している……」

「なに、そんな単純なダイニング・メッセージなわけないだろう！」

「いいや、君こそが眞の犯人なのだよ。床がまんべんなく、血にまみれている以上は、空白に血文字を書くこともできない……。それならば、こうやつて表現する他に方法がなかつたのだね」

吉野葛は愉快な顔をして断言しました。

「でも、刺されて倒れたのであれば、そこから自力で両脚をこうして折り曲げるのは難しくないかしら」

二年の羽咲七海は、本作のヒロインらしく、可憐に言いました。

「難しかなさいさ。渡邊瑠奈は小学生の頃から体操をやつている。一旦、寝た体勢から両脚で踏ん張れば……」

こうなると鍋島犯人説はいよいよ濃厚です。わたしもまた、吉野葛探偵の言葉を聞いて、ほつとしました。鍋島はまだ否認を続けておりましたが、自分が犯人だと周

団に思われていて、次第に抵抗力を失い、項垂れていました。

「それならば早く、麓の警察署に行つて、自分の身の潔白を証明させてくれ。ここでお前たちのリンチを受けるのは勘弁だ」

探偵役の吉野葛も、これで大丈夫だと思ったのでしょうか。にやりと笑つて、縄で鍋島を縛り上げると、麓

の町まで連行しようになりました。皆、すぐに荷物をまとめて、警察署へと向かうべく、あのロープの吊り橋へと向かつたのです。何も知らずに……。

わたしだけは後から行くからと言つて、ひとり湖月荘に残つていました。

（馬鹿に静かだ……）

その時、ロープの吊り橋が切れ、みんな谷底に落ちてしまつたようでした。

「おやおや、まさか、みんな死んでしまうとは……」

わたしは笑いました。

さあ、ここらで楽しい種明かしをしましよう。

渡邊瑠奈の死亡時の体勢の秘密を申しますと、彼女は直前にストレッチの『ブリッジ』をしていました。あれはブリッジが、崩れた格好だったのです。そして洗面台の棚の中にあるはずの『鍋の蓋』を取つたことについては、これも簡単で『わたなべるな』の名前から『なべ』の二文字を『取る』という暗示です。すると、残る言葉は『わたるな』となり、ふたつの言葉を合わせると『ブリッジ、渡るな』というメッセージになるというものでした。橋を渡るな……。

渡邊瑠奈は断末魔に、犯人の名前を指摘したかったのではありません。みんなに命の危険を知らせるダイイング・メッセージを遺したかったのです。

それでは何故、わたしだけ生き残ることができたのだろうかと不思議に思われるでしょう。

タネを明かせば、単純なことです。

あの吊り橋のロープにナイフで切れ目を入れたのは、他ならぬこのわたしでしたのです。

それに気付いた渡邊瑠奈を、包丁で刺して口封じしたのもやはりこのわたしでしたのです。

わたしが台所から出てゆくと、彼女は出血しながらつ掴んで、その上でブリッジをしました。そして血を噴

き出し、ブリッジの格好は崩れて、呆氣なく死んでしまったというわけでした。

ダイニング・メッセージというのは残すのが大変なのです。その意図は分かりましたが、わたしは放つておきました。探偵取りたちに勘違いが起ころのを一目見たかったです。結果は、もつとも悲惨なものになりましたね。

そもそも、わたしは生粋のミステリファンであるため、この山荘を醉狂でクローズド・サークルにしようと思つただけなのですが、吊り橋のロープをナイフで傷つけているところを渡邊瑠奈が目撃して騒ぎ出したのがいけなかつたのです。彼女は本当にわたしがなにやら殺人事件を起こそうと思っているのだと勘違いをして喚いていました。人を呼びに行こうとしていたのです。冗談の通じない子は困つたもので、黙らせるには包丁で刺し殺す他、なかつたのですよね……。

今、この山荘はガランとして静かです。『そして誰もいなくなつた』のではなく『そしてわたしだけ残つてしまつた』というわけですね。こんなブラックジョークを言つても笑つてくれる人はひとりもいません。みんな死んでしまつたわけですから……。なかなか救助隊も来ないし……。やれやれ……。いつまでこのわたしを待たせる気だろうか……。それまで冷蔵庫の中の食料がもつといいけれど……。

◇了◇

お読みいただきありがとうございます。「新生ミステリ研究会」所属のKanです。名探偵羽黒祐介シリーズの「赤沼家の殺人」「カルマ・マンダラの殺人」「妄想禅殺人事件」というミステリ小説を販売しています。

